

2026 年 7 月に 10 日間、インドネシアを訪問した。主にジャカルタに滞在し、バンドンに一泊、最後にバリ島で 2 泊した。日本留学・就職フェアに参加し、日本語学校を訪問、バリではケチャックや宮殿の踊りを見て、バトール山頂に登り日の出を見た。



ジャカルタの近代化、林立する高層ビル

アジアの中でも、ジャカルタは圧倒的に近代化が進んでいると感じた。高いビルが林立し、道路は広く整備されているように見えた。アジアの都市は急速に発展していて驚くが、発展度合いでは、低い順ではカトマンズ、コロンボ、ヤンゴン、ダッカ、上位にハノイ、ジャカルタのように思えた。タイ、マレーシアはさらに近代化か。



日本企業の進出、多くの日本車、日本食レストラン、カラオケ。中国 EV 車の進出。

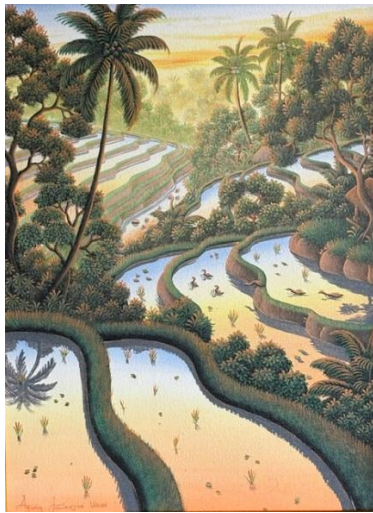
ジャカルタは日本企業の進出がとても多い。カトマンズの 1000 倍以上にも感じた。南アジア、東南アジアは日本車比率がどこも高いが、インドネシアが 9 割ほどと 1 番高い感じでネパールが 4 割ほど？と特に低い。インドネシアは他国と違い韓国車は目立たない。ただインドネシアでも中国 EV がグングン伸びている。なぜ日本は EV をやらない？と聞

かれた。

教科書で日本に感謝

インドネシアは教科書に、オランダからの独立のため日本は多大な貢献をした、という記載があると聞いた。大事な親日国だ。

ベトナムも日本企業進出が多いが、最近は韓国半導体メーカーの工場進出などあり韓国に押され、日本語熱も下火になっている。



日本へは留学希望者が稀で働きに行きたい人ばかり、庶民は貧しい？

インドネシアでは日本語学校は多いがお金がないからと言って留学希望者は少ない。ジャカルタはGDPも大きく、日本も顔負けのような街の発展ぶり、高層ビルの林立なのに。留学希望者は少なく、ほとんど働きに行きたい若者ばかりだ。地方や島では農家など年収が40-50万以下が多いようだから留学に必要な年収200万程度は満たさないが、地元の若い人が、一步裏道に入れば貧しい人がたくさん暮らしている、と話していたが、ジャカルタ滞在7日目に初めてすごいスラム街に行き当たった。

年金は夢の世界！ 親に給料の4割近く仕送りする若い人

大学の日本語学科を卒業し、日本の車部品メーカーの現地法人社長の秘書をする女性の話聞いた。働き始めて半年。日本語試験N1合格、給料7万円、1年目なのでまだ少ないそうだ。うち2-3万円も親に仕送りをし、2万円を貯金し、残りで生活していると。親から親孝行することを叩き込まれたから、という。大変。1000円ほどの日本食をご馳走したが、普段はその10分の1の食費でやっているそうだ。最低賃金制度があり月5万円ほど？と言うが大学卒だけの制度で、高卒には適用はなく、採用企業の好き勝手に低賃金で働かされているという。給料2,3万円くらい？仕事がない、低賃金、でも中国系華僑はものすごい金持ちで、なんでこんな国になったと不満いっぱい、みんな外国に出たがる、という若者の声も聞いた。

年金は公務員しかもらえない、年金など夢のような話、と。年金問題はあるが全国民がそれなりにもらえる日本は幸せ。

インドネシアは昔、ヒンズー教だった。商人がイスラム教を広め、バリにだけヒンズー文化が花咲く

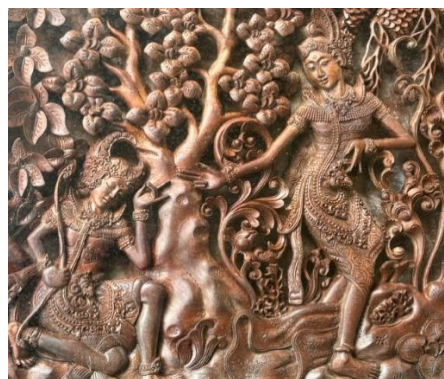
イスラム教は、アラブ諸国に中央アジア、北アフリカ、バングラデシュから離れて、東南アジアのマレーシアとインドネシアに広まった。

どちらもインドの影響でヒンズー教だった。そこに争い、戦争もなくイスラム教が普及したという。それはイスラム商人が来て浸透したそう。アラブ諸国と違い紛争なく普及した点が不思議だ。敬虔な仏教国のミャンマー、タイを通り越して。

そして、ヒンズー教徒はバリ島だけに逃げ集まり、素晴らしいヒンズー芸術文化が花開いている。

日本での就労目指し半年以上も合宿し、日本語学ぶ

ジャカルタの大きな日本語学校を訪問した。留学希望者はいなく、特定技能などで日本で働くために半年以上合宿生活をしている。留学費用を出せる学生はほとんどいないという。100人以上の男女が介護や建設、農業などの仕事のため。独身の先生方も合宿している。朝は5時半に起床、礼拝や運動で始まり8時半には日本語の授業が始まる。食堂という特定の場所はない。IQが一定以上高い学生を選んで入学させているのも驚き。勉強に集中させるため、携帯は学校が預かり、問題ない学生に日曜日使わせているという。



勇壮な歓迎儀式

私が日本語学校に到着すると、100人ほどの学生たちが屋根だけの吹き抜けの講堂で整列して待っていた。私は挨拶し、フルート演奏を数曲披露することにした。ひとつに、アベマリア。イスラム教の国で申し訳ないが、名曲なのでと言うと、それではキリスト教徒は前に集まるように指示がなされ、10人ほどが並んだ。キリスト教徒が10%ほどいる国なのだ。イスラム教かキリスト教かはっきりしていて信心深い。それに比べ日本は宗教心が薄れている。

男子学生のクラスで話をさせてもらおうと、歓迎の勇ましい儀式を披露してくれた。パプア、サモアのラグビーの試合前の儀式を思わせる勇壮さ、圧倒する元気。

巨大なモスクとキリスト教の大聖堂が向かい合う。オランダ風の街並み。

ジャカルタで時間がないなか、インドネシアで最大だというモスクを訪れた。残念ながら異教徒は夕方5時以降中には入れないと門前払い。

道路を挟んだ向かいにキリスト教の大聖堂が夕空に照らし出されている。

オランダの植民地だった時期にこんな大きなキリスト教の大聖堂が建てられたのだ。

仏教国で、中国の900年も属国だったベトナムのハノイにもキリスト教の大聖堂があった。日本にはあれほど大きい大聖堂はないが。

オランダの影響で街は道路が広く区画整理され、洋風の建物が並んで、ヨーロッパの街のような感じのところが多く見られた。



平日昼間は日本企業で働く日本語学生たち

ジャカルタ郊外の日本語学校を訪れると学生たちの多くは平日昼間は日本企業で働いているという。日本の特に車、電気関連の工場が進出し働く場がある、それだけで言うと豊かで恵まれた環境だ。ネパールには日本の大手中堅の企業進出はほとんどない。ミャンマーは8割の外資系企業がクーデター後に引き上げたままだし、スリランカは観光主体で日本企業進出はさほど多くない。

中国による新幹線、Whooshに乗った。乗客予想より少なく80年で借金を返すことに。

ジャカルタから45分ほどでバンドンに着いた。高原らしく夕方は涼しい感じ。ジャカルタも日本より夕方は涼しいと思ったがさらに涼しい。

この新幹線はまだバンドンまでしかなく、その先はこれから建設する予定らしい。

片道だけ一等に乗ると、飛行機のスチュワーデスのような女性がいてお菓子をプレゼントしてくれた。日本は新幹線建設争いで敗れ、中国の施工。なんと乗客見込み数の30%くらいしか実際の乗車率がなく、借金返済期間を80年に延ばさなければいけない状況になっ

てしまった。

バンドンで待ち合わせの高校卒業したばかりの日本語ができる子が隣の駅で待っていてなかなか会えないハプニングがあった。

イスラムでは子供が多い

イスラム教の国、地域は他より出生率が高い。ネパールや中国では5歳以下の子供が大幅に減っている。しかしインドネシアはまだ減少傾向はわずかだ。スリランカでは、イスラム教徒だけが人口が増えていて、仏教徒やヒンズー教徒などは減っているそうだ。

ケジャブを被る子は半分、ミニスカートの子が目立つ

ジャカルタやバンドンの夜の街には若者が日本人顔負けに元気に遊び歩き、女性はミニスカートの子も目立った。ケジャブで髪を隠す子は半分以下か。朝は5時過ぎから礼拝する人が多いようだがこんなに遅くまで遊び回っているとどうだろう。



ラーメン屋がデートスポット

ジャカルタではラーメン屋がオシャレに広く店を構え、デートスポットになっていて驚いた。

華やかで賑わうショッピングモール

ジャカルタには華やかなショッピングモールがいくつもある。貧しいひとが多いと聞けるが、少し豪華で憧れる商品の店が並び、若者たちで賑わっていて活気がある。日本レストランもいくつもある。

配車アプリの普及

タクシーをアプリで呼ぶGrabなどのサービスが普及し、日本の遅れを肌で感じる、ネパール、コロンボ、ヤンゴン、どこでも当たり前で普及しているが。

バリ島に3週間滞在するフランス娘4人と日の出山登りツアーに

バリ島でも二つの日本語学校を訪問し、標高1700m超のバトゥール山の日の出山登

り、バリ舞踊観賞ができた。

日本人が10年前から減っていると言う。韓国人、インド人など増え、文化の町ウブドゥはヨーロッパが多く、ある海岸の町はオーストラリアから年金生活者が多いと言う。バトゥール山のガイド付き日の出山登りツアーにフランス人の若い女性4人も参加した。3週間のバリ滞在という。オーストラリアのタスマニア島で1年間、ジャガイモやりんご栽培農家でワーキングホリデーに来ているという。ガイドもフランス娘も元気だ。私が3日だけのバリ滞在と言うと、驚いていた。出張のついでだからと言い訳を言うが。日の出が雲海に登る山頂には200人ほども欧米などの観光客がいた。暗い山道をみな2、3時間登って来て。日本人は私ひとりか。ヒンドゥー文化の町ウブドゥでは、ケチャックダンスなど幾つもの舞踊団が毎晩のようにあちこちの王宮や寺院の境内で演舞している。

バリ舞踊 ダイナミックに、洗練に

ケチャックはインドのラーマーヤナ物語を演じている。100人以上の男たちがケチャを唱え、シータ姫が魔王に連れ去られるシーンは印象深い。王宮の踊りと言われるレゴンは、その繊細な指先の動きと洗練された深い文化を感じさせる。日本から15人ほどの熱心なグループが最前列の席を予約していた。日本公演によく来ているという歌舞団ティルタサリ。ガムランの音楽にも感銘を受けた。



ウブドゥの町は昔は静かで穏やかで絵画に溢れた印象だったが、今は王宮あたりは欧米の若いグループで溢れ、土産屋の道はごった返していた。

バリの空港は華やかな店が並び、レストランもたくさんあって賑わい、観光ビジネスが花盛りだ。

東京帰国便のガルーダ航空にさんざん並ばされた。しかしソウル直行便のある韓国人はスムーズにチェックインできている。韓国と日本の国の勢いの違いを感じた。バルセロナでも同様に韓国から直行便があった。

